
道化の本質

夕霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
道化の本質

【Nコード】
N1866V

【作者名】
夕霧

【あらすじ】
アレンは、コムイの薬を誤って浴びてしまう。
その薬は、浴びた者はその者の本質が出てしまう薬だった。
穏やかな性格で有名なアレンの本質は一体・・・？

全ての混乱はここから

「リナリー！室長知らないか？」

「？知らないけど……。また兄さん抜け出したの？」

「ああ。しかも今までに無いくらい仕事が溜まっているときにな」

科学班の皆にコーヒーでも淹れてあげようと訪ねてみたら、科学班総出で室長探しが行われていた。

話をリーバーに聞いて見ると、コムイが仕事中に消えたらしい。

また逃げ出したのかと呆れるリナリーにリーバーが思いついたように言った。

「リナリー、ちょっと頼みたいんだけど、大声で『兄さん、出てこないと嫌いになるわよ』っていつてくれ」

「？いいわよ」

そこでリナリーはすうと息を吸って叫んだ。

「兄さん！出てこないと嫌いになるわよ！！」

「リナリー！嫌いになっちゃいやだあ！！」

言うが否や、リナリーの真後ろの影から飛び出たコムイを見逃さず
にリーバーは襲い掛かる。

他の科学班も襲い掛かってコムイは縄でぐるぐる巻きにされた。

「リナリーありがとよっ！」

「どういたしまして！」

「ひどいよ皆・・・」

ぐっと指を立てるリーバーにリナリーはウインクで答えた。床に転がされたコムイはリナリーに騙された所為かぐすぐすと半泣き状態だ。

「で、兄さん。皆に迷惑かけて何をやっていたの？」

「そうですよ室長。今ものっそい仕事溜まっているんですけど」

コムイの机が見えないほど積もっている書類を示しながら言うところコムイはあからさまに顔を背けた。

「息抜きに開発中の薬を完成させたんだよ！これを飲むと本質が出ちゃう薬だよ！」

「んなもの作っている暇があったら仕事をしてくださいよ！」

リーバーを主に科学班からブーイングが飛ぶ。ついでに殴る蹴るの暴力も少々。

「皆、ひどいよー！」

泣きながら、八つ当たり気味に誰かが被りますようにと祈りながらコムイは薬が入った小瓶を投げた。

そこにアンラッキーボーイことアレンが任務の報告をするために部屋に入ってきた。

「失礼します、コムイさんいますか？」

その言葉が言い終わるか終わらないかのところで小瓶はアレンの頭の上に。

小瓶は、空中で蓋が外れて中身がアレンの頭にかかった。

1テンポ遅れて小瓶がアレンの頭にぶつかってアレンは、倒れた。

「あ、アレン君!？」

「ちよっ、室長何やってんすか！」

小瓶の破片を頭に刺してだらだらと血を流すアレンをみてリナリーは慌てて駆け寄った。

応急処置をして、アレンは医療室に運び込まれた。

「ま、アレンは穏やかで優しいやつだから、室長の本質がでる薬を飲んでもあんまり変わらないでしょ」

「本当にそう思うかい？」

そんなに、大事に捉えていないリーバーにコムイは訳ありな顔で応えた。

「アレン君は優しいから、自分の本質を隠しているんだよ。」

彼の本質は、穏やかではなくもっと激しい激情だと僕は思うよ」

「ま、かつこよく言っても元凶はアンタですからね。早く仕事をしてくださいよ」

リーバーの冷徹な一言でコムイはぼつさりと切り捨てられた。

・・・これから起こる惨劇に誰も気付くことはなかった

全ての混乱はここから（後書き）

初めまして夕霧です。

初投稿ですが、この先どうなるか分かりませんが、アレンへの愛が煮詰まって投稿してしまいました。

キャラの口調が違ったり、誤字脱字があるかも知れませんがそのときは報告お願いします。

それでは、これからもよろしくお願いします！！

笑顔の仮面を道化は外す

僕は、ゆるゆると穏やかに意識を覚醒させた。
何故か視界は全て白かった。

「あ、アレン君。気がついた？」

リナリーの声が聞こえて僕は起き上がる。
するとべしょつと水を含んだ音を立てて濡れタオルは落ちた。
なるほど、白の正体はこれだったのか。

「アレン君、気を失うまでのこと覚えている？」

「え……。そういえば……」

確か、任務の報告をするためにコムイさんに会いに行ったら何か騒いでいてコムイさんが何かを投げたなと思ったら頭に衝撃が……。

「ごめんね。兄さんが間違ってアレン君に薬をかけちゃって。」

「……それってどういう薬だった？」

「自分の本質が出てしまう薬だって」

ほ、本質って……。僕は少し、困った顔になる。

マナという仮面を被っている僕はいつも敬語で紳士だ。
だけど、それは仮面。

僕の本質は、紳士とは程遠い。例えるなら、〔赤腕〕よりも少し丸くなったような。

だから、もしマナの仮面が外れてしまったら、例えば……

「お、アレン君！目が覚めたの？」

「んなことよりも、この薬についてもっと詳しく聞きたいんだけど？」

コムイさんが僕に気付いて陽気に話しかけてくるのを、僕はまるでゲームのラスボスのような仕草でそう言った。まさかこんなに口の悪い返事が返ってくるとは思わなかったコムイさんは、見事にショックを受けた。

おかしいな？いつもみたいに笑って「大丈夫です。それよりもこの薬について聞きたいんですけど」って言うつもりだったのに……。僕は一人で首を傾げる。

それを見ていたリーバーさんが恐る恐ると言った様に話しかけてきた。

「なあアレン。……お前はアレンなのか？」

「は？なに言ってるの？俺は正真正銘アレン・ウォーカーだ」

気まずい沈黙が落ちた。

〃〃〃

あの後、ひとまずコムイさんを立ち直らせるためにリナリーが話しかけてコムイさんを復活させた。

そして、一通り話を聞いた僕はコーヒーを飲みながら感想を言った。

「俺も敬語は喋れないみたいだし……。曲がりなりにもあの薬は成功してたってことだな」

「というかお前そんなキャラだったっけ？」

リーバーさんが、そう言ってきたので僕は、答える。

「そんな訳無いだろ？」

「で、ですよー」

「けど、アレン君がカンダ並みの口の悪さだなんて。それはそれで面白いわね」

リナリーが、にこにここと笑いながら言う。

僕は、神田と同じにされたことがちよつと嫌で、反論する。

「カンダと一緒にしないでよ。俺は、カンダよりはマシだよ」

「いやいや、カンダ君といい勝負だよ」

「うるせーな。道化ノ帯で窒息死してーのか」

「あれ？リナリーと話しているほうが何か妙に優しくね？」

「それは当たり前だろ。女性には優しくしねーと」

「もしかしてアレン君！君もしかして気があるの！？」

「まさか！そんな訳ないだろ！俺にリナリーはもったいねえよ」

「アレン君・・・」

口が悪くなっても女性には優しいらしいアレンにリナリーはついポツと頬を染める。

敬語ではないので、男らしさが出たのか・・・。

天然なアレンに、ほとんどの面々は沈黙してしまったがただ一人、コムイは怪しげな笑みを浮かべる。

「ふっふっふ・・・。リナリーに恋はまだ早ーい！！」

そして、おもむろに天に指を指す。

「出でよ、コムリンDX！！」

「了解シマシタ」

ピカッと上で何か光ったと思ったら、ロボットが上から降ってきた。

そのロボットはガシャン！と華麗に着地するとアレンに標的を定める。

「な、何だこれ！？またコムリンかよ！」

「ふっふっふ。今回は、リナリーを護る為だけにあるリナリー専用コムリンなのだ！行け、コムリンDX！リナリーに手を出す不埒な輩の首を取れー！」

「手を出すって！俺がそんなことするわけ」「アレン・ウォーカー
危険 排除シマス」ってええ！？」

ガシヨンと武器を取り出すコムリンDXにアレンは戸惑う。そんなアレンに構わずコムリンは攻撃を仕掛ける。時には剣を振り回し、時にはハンマーを振り下ろし、時にはビームを出したり爆弾を出したり。

どんどんと崩壊していく黒の教団を見て、アレンはイノセンスを発動する。

「教団をこれ以上破壊するなよ！十字架ノ墓^{クロス・グレイヴ}！！」

「リナリー護ル 我ノ役目」

「嘘ォ！？」

そう言って、アレンの攻撃を受け止める。その無傷なボディを見てアレンは絶句する。

「はっはっは！イノセンスの攻撃も防げる超ハイスペックコムリンなのだ！」

「そんなことしてる暇があったら仕事をしろ！」

「聞こえない聞こえない！」

科学班一同から避難の聲が上がるが、コムイは高笑いで誤魔化する。その傍らではどんどんと追い詰められていくアレンの姿があった。

「コレデオワリダッ！」

「待って！」

剣を振りかざし、アレンを討とうとするコムリンを制止する聲が響いた。

リナリーだ。リナリーは、コムリンをキッと睨みつける。ついでにコムイも。

「兄さん、やりすぎよ！教団が半壊しているじゃない！コムリン、止めて。仲間を傷つけないで！」

そう言うと、コムリンは急に静かになりガタンと音を立てて動くのを止めた。

何が起こったんだと疑問を抱く一同に、コムイの悲鳴が響いた。

「しまったー！つい、リナリーを護ることを重視しすぎて、リナリーの命令を最優先に聞くように設定しちゃったんだった！」

「兄さん！あとでたっぷりお話ししようね？」

「俺も是非混ぜてもらいたい」

笑顔でコムイに迫る2人にコムイは、何とか話題を変えようと喋る。

「け、けどアレン君も口調が変わったぐらいでそんなに変化は無いね！」

「あゝそれは俺も思いました。その口調に一番驚いたんすけどね」

コムイの言葉にリーバーも賛成する。

「あ、わたしもそう思うわ！アレン君、敬語をやめたらいいのに・・」

「やっぱりアレンは優しいなっ！」

リナリーとジョニーも口々に言う。

そして、アレンは口を開く。

「本当に、そう思う？」

「え？」

独り言のように吐き出された言葉に、一同は疑問を含んだ声を出す。

「アレン君、それってどういうこと？」

そう聞いてくるリナリーにアレンはただ哀しく微笑むだけだった。

笑顔の仮面を道化は外す（後書き）

口が悪いアレンです。口調がもう分かりません。

女性に優しくは相変わらずだといいなゝ的なことを考えていたりします。

最後の方がちよっぴりシリアスっぽくなってしまいました。ギャグに戻ります。きっと。

久しぶりの投稿で、もう一つの作品に比べてかなり遅いですね。今回も乗りで書いたので、第3話がいつになるかは分かりません。

それでも、よろしければこれから応援よろしくおねがいします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1866v/>

道化の本質

2011年10月7日22時24分発行